

第6室 書跡

－法隆寺伝来の法華經－

N-12 法華經（ほけきょう）

黄麻紙に薄墨の界線をほどこした料紙に、『法華經』8巻を通例の一行17文字詰めに書写しています。やや肉太で、力強い筆運びで書写され、全巻一筆です。奈良時代の整然として端正な写經に比べるとやや柔らかみを帯びており、書写の時期が平安時代にかかっている可能性があります。

第6室

染織―修理後初公開の袍残欠と復元模造―

染織では、令和2年（2020）に本格修理が完了した伎楽装束の「袍残欠」と、修理時の調査に基づき、文化財活用センターと東京国立博物館の共同で制作した復元模造を展示いたします。「袍残欠」は古代の袍の全体像を把握できる貴重なもので、これは正倉院宝物をのぞき唯一の作品です。この作品は法隆寺献納宝物の未整理品から見出されたもので、今回が修理後初の展示となります。また、復元模造は修理の過程で明らかになった、作品の構造をもとに制作しました。復元模造と見比べ、「袍残欠」の当初の姿を想像しながらご覧ください。

N-325：袍残欠（ほう ざんけつ）奈良時代・8世紀、平絹（へいけん）

古代の仮面劇である伎楽（ぎがく）に用いられたと考えられる袍の残欠です。現状では右の前身頃と右袖が確認できます。黄色に染められた平織の絹（平絹）を表地とし、裏地には淡茶色の平絹をあてています。右の前身頃の裏面に帯紐が残ることから、左前で着用したと考えられます。修理では部分ごとに解体し、一枚の裂（きれ）の状態に広げたのち、和紙で裏打ちし、再びもとの形に組み上げました。

伎楽装束 袍（模造）（ぎがくしょうぞく ほう もぞう）令和3年(2021) 平絹（へいけん）

N-325「袍残欠」の解体調査により明らかになった構造や寸法、仕立てに基づき復元制作した袍です。両脇は縫われますが、下端の一部がスリット状に空き、別裂によって縁取られています。原作品では、右の前身頃の裏面に帯紐が残存することをふまえ、左の裾に帯紐をつけ、左前で着用できるように復元しました。袍の上に腰帯などを巻き、着用していたと考えられます。

監修：文化財活用センター、東京国立博物館

制作統括：株式会社染技連（せんぎれん）

平絹：永井織物株式会社（永井幸三郎）

染色：紺九森芳範

仕立て：仕立て屋千浪（坂本多寿子）